

江戸時代随筆集にみる狂気 第一報

昼田源四郎

も呈示しながら、この問題について考察してみたい。

(参考文献)

昼田源四郎 『守山領御用留帳』の精神医学的研究 精神経誌

八六卷 六九九―七三五頁 一九八四。

(針生ヶ丘病院)

江戸時代随筆集に記載された狂気の事例から、今回はその病因解釈について検討する。

随筆集のなかの記載では、狂気の原因は、祟り、呪い、報い、憑き、虫、妖異などと解釈されていることが多い。

これは演者が『守山領御用留帳』という公文書的な性格をもつ史料で検討した病因解釈とは、かなり異なるものである。随筆集にあらわれた病因解釈が、そのまま当時の大多数の人びとの解釈を代表しているかどうかは、直ちに断ずることはできない。ただ、これらの解釈図式の多くが、狂気以外にも、当時、異常怪異の説明にひろく用いられていた解釈図式であることは注目してよい。つまり非日常、異常を解釈する祟り、呪い、憑き等々の大きな説明体系があって、そのパラダイムの部分的適用として狂気の病因解釈もなされたのだ、という想定が可能である。当日には事例